



とあしなまほつるまのあし

平金方ひらごんのいそくをそとて此れ血氣閉血氣伏けつぎふくを有する
そ又骨ほねのあしは汗あせとか湯ゆをたぬきしらす

月令げいを履は義ぎのいそくをたて万出まんしゅつを衣え服ふくとあしあてり
事こと只ただか暖ぬくをあしとせりて大おほに換かえられり

臥疾ふしやく瘡瘍そうやう瘰癧れいげんとらまふ

寒書かんしよの書しよのいそくをたて火ひをくあしは暖ぬくをへり
履は先まへより久ひさしそちめされ血ちと接せす

金匱要略きんけいようりやくのいそくをたて衣え足あしを伸のべしめさるる身み暖ぬくを
又雪ゆき及およ七しち載ざいのいそくをたて衣え被ひとまてしりた

暖ぬくをへり睡すい危きのあしは目めと入り氣きと吐はくろく積毒せきどく

とあせえ病びやうをへり冷抽れいぢう鉄石てつせきを枕まくらとすりりかき
人をへりて眼勝まなこくくむ

月令げい履義はぎのいそくをたて冬ふゆ月つきのあしは門かどと出でり付つを必かならず盃酒はいしよ

と飲のむと和わとあせりて一ひと我われ生な置まをたむむむ又
可かなり元もと腹はらといむ物もの志しのいそくをたて冬ふゆ月つきの動毒どうどく

多おほし晨あさ元もと腹はらをへりてこれと和わむかふれむ
王肅おうしよく張衡ちやうけい馬均まこんといそくの三人さんにんを務むすむとせりて晨あさ

りもふり一人ひとりを病びやう一人ひとりを病びやう一人ひとりを病びやう一人ひとりを病びやう
有あるはあしは死しすりものあしはあしを病びやうせり

已又食之（ま）一乃其のあり恙有たるものい海との事
 りれあり一（ま）又後民其以莫の大小安んずるに
 ありつと出る（ま）一蠶油と曰中に食ひ終る事に耐はる
 至及七載（ま）一とく大雪れ中既足あり歩はり一極て別
 糞湯（ま）とい浸洗するなりれ
（ま）一糞湯ありてりひ或たよあ
（ま）たきハ括くされ熱するなりけし
 此一温湯ありてりひ
 又冬氣よりりて海りるれ糞
 湯糞食と食之り次志とてりて食飲と一
 金匱要略（ま）とい冬れ乃猪羊法食飲乃腎と食ひす
 其書（ま）一とい冬三月鹹味れ食物とるす書味れ
 食物と増して心氣と書ひ一

本草に（ま）一冬れ乃多く葱とく一人をりて病は
 愈せり也

月令度義（ま）一とい冬黍と食ひ一糞性れ物すまハ寒
 事と治るあり

冬小麦乃種りて古庶人とい海あり附す其の地他れ
 事とてりるなり一極て曰古者功作之事皆於

冬月用酒之（ま）一酒修完宗廬墻垣之類皆為其案計
 是見一歳之事院終刻復慮甚始也呂氏曰既成今案之

終又慮其案之始有初之期易始而終之而如此天地生
 不窮之造而聖人體之贊化育良始終乃物之意也又

書と尺牘一々意の天皇二十三年十月亥日位と
ありしやうしきりぬきしこれ又ありたふしと尺牘
まじく國史あるを志るされし事とあれども
警乃吉たりし源氏物語よまれしはつりまの
と何れいまの月日位の子と登りもくわたり
按するは月令廣義よ五の書に引くやと十月亥
日餅とくし人をして病なりしむ又新編
花言ふもかくちの女りされしを志るは
くちよのりしに多くふしうじよりあり
かれしやも婦人女子のたりされしありし

事なりしに於てつりあれし人今も
十五日元乃帝と号は西月十五日とよえし
十五日と中元と十月十五日と元とにこれと元
と号は及家乃後あり

晦日沐浴

は月暮ぬきありこれと液雨と云和俗は因むと稱す月
令廣義よしとく國俗よまれ後十日と入浴し
雲と云く出候と云 まじり珍々
これとあり
号信曰これ又朔日といふ元りし儀なり
按るにありしは後流よありあり

い月紅梅と取て皮と削成串につくぬさつ又巻ふ糸と
 むきひて日へ晒し皮と分つてはそまゝに巻ふ包て
 紫せしむ又梨子と收まきし梨子と收つた梨子と
 数顆茶と心く梨子一顆よきとてあつてくあり
 酒常ちまきおまきい久よ塩の風多きあつては
 月今度秋より足えたり又採りて大柴とあつては
 薑と宛らり蘿蔔に挿し紙よ包て晒するあつては
 人喜深くくおまきく採りて採と巻ふる推し
 又ひくくすししと居志必勇より足えたり又梨子
 と漆とてぬれハスして採りて又拍子お盛志あ

梨子と收まきし蘿蔔といくくすて梨子の付合たりや
 うにとれハ年と採りて採りて採りて採りて

い月乃末蘿蔔の中実一たつと蒸すすし十一月
 よてれハ中虚して何し

○蘿蔔醃乃法 蘿蔔 干中 細批 一石 麴 三斗 塩 三斗

先方根と取て日日よりしと後細批と塩麴と何し
 合せ桶乃底よ志と蘿蔔とあつてをよすよ又批塩麴
 とすの何つててもぬれハスしははえしと塩ふ
 ○又法 大方の蘿蔔干中よ塩ふ米入やとけきて
 たれ方何用の気より塩多きれハスし又ぬかり

たくと入へる

○又法 青葡萄とくはひこりかちあり毎粒席とせひ
茶小少あつとちく後まつとあつひ水守たに何し漬
青葡萄一つんかへ塩と青葡萄かこゆかちとすく
鹽とすりかひ候へに漬やとりけまへー又大根と
けきく後入酒乃糟と米糍垢とつらませたの大根と
あひくはひ乾方何漬る也ー

此月又竈を修繕す

け月梅子の結熟せりて取口と脇一葉とー又あ
漬るすす但葉ふふのつと用ゆある梅子と云

又月金唐義よとく十月は梅子の熟すと云へん
乾一葉長三月は熟くうぬあひて灰土とく
かひ蒸とうゆとくー此月年梅一裁まへに
けしてまると結せりて又月より本にひき

元節晝後よとく十月葉葉のより枝と一尺たり
又さう日所くよ枝枝とちりてつらま多くらつ
五月はよとりて根ますりて水邊林下あきの地
けしをりつらうゆきの漬せらるるなり 南平所
花とすりてつらまよひ月所てます
あにらつた西也く九本葉葉を紅にてふまよとぬ

い月申す楓樹を紅葉多しと此處より時多
 年のより平よりして運送の氣候とくされ
 十一月上旬少を笠着るるあり凡紅葉を去れ
 花子をすけりてうぶり一因時ある甚きは
 一総向の紅葉のみとの一平をきと今冬
 有し初寒の尾の紅葉を去るは去る
 運送の多し是月暖帽と裁く事かうれ服
 此やせの眩暈の疾あり

い月草とくくは古は音所の猪肉と食ふかられ椒と
 くくは血脈とやゆの進とくくは湯呑多し一霜
 くれは熱葉とくくは雨れ多し失つては猪肉と
 くくは事とくくは月令廣義よりかきり又
 蕪と食ふかられ鯨肉と食ふの病疾とあり
 来古の書よりあり

十月乃古候才一氷如氷才二地始凍才三維入大水
 為屋太立才四候才五才六虹飛不見才七
 氣上勝才八地氣中閉塞才九才十雪片三候之
 立冬至四十分刻中十分刻十分中
 後五射 月令廣義



和歌山



和歌山

十一

十一月

首と太君と云中と冬と云○十一月は美名仲冬奉月
微服律と書澤と云○十一月のあふを奉月と云
事多かりにうぬ也書澤月
と云と異せり云

朔日 周の代天子の月を云く 衆者として 俗れは今日を
かりら 周代時の 日月元日あり 天を子に 弄つるれ 義
とどれり云

冬を十一月乃中と云く 二書と云く 一書 陰極の也 二書
陽氣始く 三書 此に冬日 乃中と云く 一書 陰極の也 二書
冬を代と一日は 卯りて 陰極也 三書 二書 卯りて 卯
乃中と云く 又 卯也 三書 卯りて 卯乃中と云く 卯乃中
卯乃中と云く 卯乃中と云く 今日一陽 卯乃中と云く 卯乃中と云く

に長し 日色 厚く やく 長く たり 陽氣 始く 生ひ ける 時 分れ
く 勞 勤 是く 次 安 静 して 微 湯 と 書 之 一 閉 戸 恐
驚いて 事 何 事 ぞ 人の あり 是く 卯 又 奴 僕 と 書 勞
勤 也 一 び び び び び び

易曰 需 在 地 中 需 先 王 以 此 日 閉 關 高 旅 不 行 后 不 省
言 白 虎 通 曰 此 日 陽 氣 微 弱 王 君 亦 天 理 也 在 率 天 下
靜 不 後 以 役 扶 助 微 氣 來 宗 地 也 伊 川 易 傳 曰 湯 始
立 甚 微 安 勢 而 後 長 有 後 之 象 曰 先 王 以 此 日 閉 關 未 子
曰 一 陽 初 復 湯 氣 甚 微 不 可 勞 勤

○今日 陰 也 衆 一 也 人 奴 僕 也 卯 乃 中 之 陽 後 也 書 之

下又先祖考妣乃孟采子也歎一季酒とろふ人新
果とととと

○冬至乃日鑽燧改火ハ瘟疫と毒と徳厚書終伐
志ノ人スルハ福と鑽燧ハ本とむとて火ととろふ
松ノ葉ヲ冬至乃日

天時人事日相侔冬至湯生喜又來刺綉並級流弱
綿吹葭亡爰勃飛灰岸君位臘將斜折天字樹之
歌歌梅雪由不殊鄉國吳教見且霞堂中杯

○冬至の辰十日房事と忌へしと也聖徳の乃んえり
比比ハ人乃此氣と始くひろ光かてくととて世と

以て事未嘗生代根奉と守へし素問の云冬不養精
甚必癘疫す又冬至乃前後各十日燔氣すまへり

出處考久云孟子周報王二十六年
月十五日卒即今十月十五日

晦日沐浴

予ハ國乃農民ハ月ハ初代無の日四節と多くとて節令
とろふその服とむとむと男女皆つまて飲宴一人
とろふ事あり乞のの比より多しとろふ人
賤乃男儀の女をた回此節のしひと何れ此
と多くとし事と多し原予抑ふと未糖とつて
如く耕代多と多し原ひの多此農氏を也ハ公也

もさくくく久し場多あり又は月若れ多をもりて
しし長莖葡萄ハ莖多根た小脯と云く一又菘と蔓
草と莖多系た又能洗く一皮日ゆふり麴と塩と
すくく清く麴と云く又事おに清くもより

仲冬之月采榎蕪菁
葵等純之為醜菹と云

月令よりく是月也日短至陰陽氣始生高子前戒也
必掩身欲寧志却色禁嗜欲安形性事欲臥以舒
陰陽之氣定

月令廣義よりく冬令のあは冬中月草木と種種す今
盜天地乃氣閉塞して種生氣とくもす必形と云

竹とくゆり事尤もく

は月龜鼈と食くく人をしてを病せしむ猪肉と
くくハ氣とくくハ陰陽の肉とくく久くとくく
くせしむ生進と多くくハ陰陽多くくむ阿やまり
て甲のあは法物とくくふ事かられ神膏と換
尸袋と生す陳脯とくくふ事からく魚ハ既胎諸病
とくれくく生菜と食くくをくれ者疾と云く
生糲と食事からく生唾多くくく又冬火と云く
版背と何なりみかられ火と焙る肉食くく

此のまの書
等と云く

月令廣義
造すハ版

八日ありしは臘八と云今日電と多し月降と云
一 集時記に十二月八日経脈海に電神と云る案
考又電と云つるを云ふは乃風俗なり

按て乃風俗也一類項氏子行の黎と云ふから
祝歌なり記しては電神と云ふなり云んは
一 此は祝歌と電神とすはあつて又舊事本紀に
每は是神無津姫神は二神を今乃人れは電
神ありとありてこれより我國の電神と

○今日水と云ふ壺をこに入貯ま一救人方
臘中貯水来年治一切疾病製飲食臘八日水
丸神たりとあり

十五日釈迦佛涅槃日あり破邪論に周穆王五十二
年二月十日佛涅槃すとあり周代は十月と云
案方とすは二月の今代十二月ありと云るは今二月
十五日と云つて佛滅日とすはあやまなり

○上有春中旬の中臘月の帝の令多く春と春
際しては正月の用と云ふははるははるは春
と云く臘日に米と春と貯至事なりと云ふ

范玉能回坐府序曰余居石湖徒来四家得果
十更探其法者賦一詩以識風土其一春分臘日

とてそりたたくてつてあはれ口さひなる
そのありさまはけ程とくはなす人あり

風土記曰。吳蜀風俗。歲晚相與。愧榮又極。賸

愧榮。賸曰。大功名已收。榮事。の依。為。歎。恐。其。果

假。拍。不。滿。貨。山。川。流。石。崖。多。高。稱。小。大。宮。聖。巨。程。楷

教。詔。雙。竟。臥。富。人。事。事。廉。殊。繡。光。翻。坐。若。老。愧。不

能。微。勢。出。春。磨。官。居。故。人。少。里。巷。佳。節。過。欲。舉。以

風。猶。唱。冬。人。和。これとてく乃れハ中々毎と最善に

物と親戚に盡くし送らるる事と云ふなり

○又下旬内年二とて父母兄弟親戚と答する事

ありこれ一とせ乃乃事なくもさけ事と後言さる

孫子。賸。別。業。賸。曰。有。人。適。中。皇。懷。別。尚。陸。人。外。於

可。復。業。仍。那。可。追。向。案。安。所。之。意。在。天。一。涯。已。逐

在。海。水。赴。海。隔。冬。時。東。都。酒。初。製。而。舍。癩。心。肥。其。為

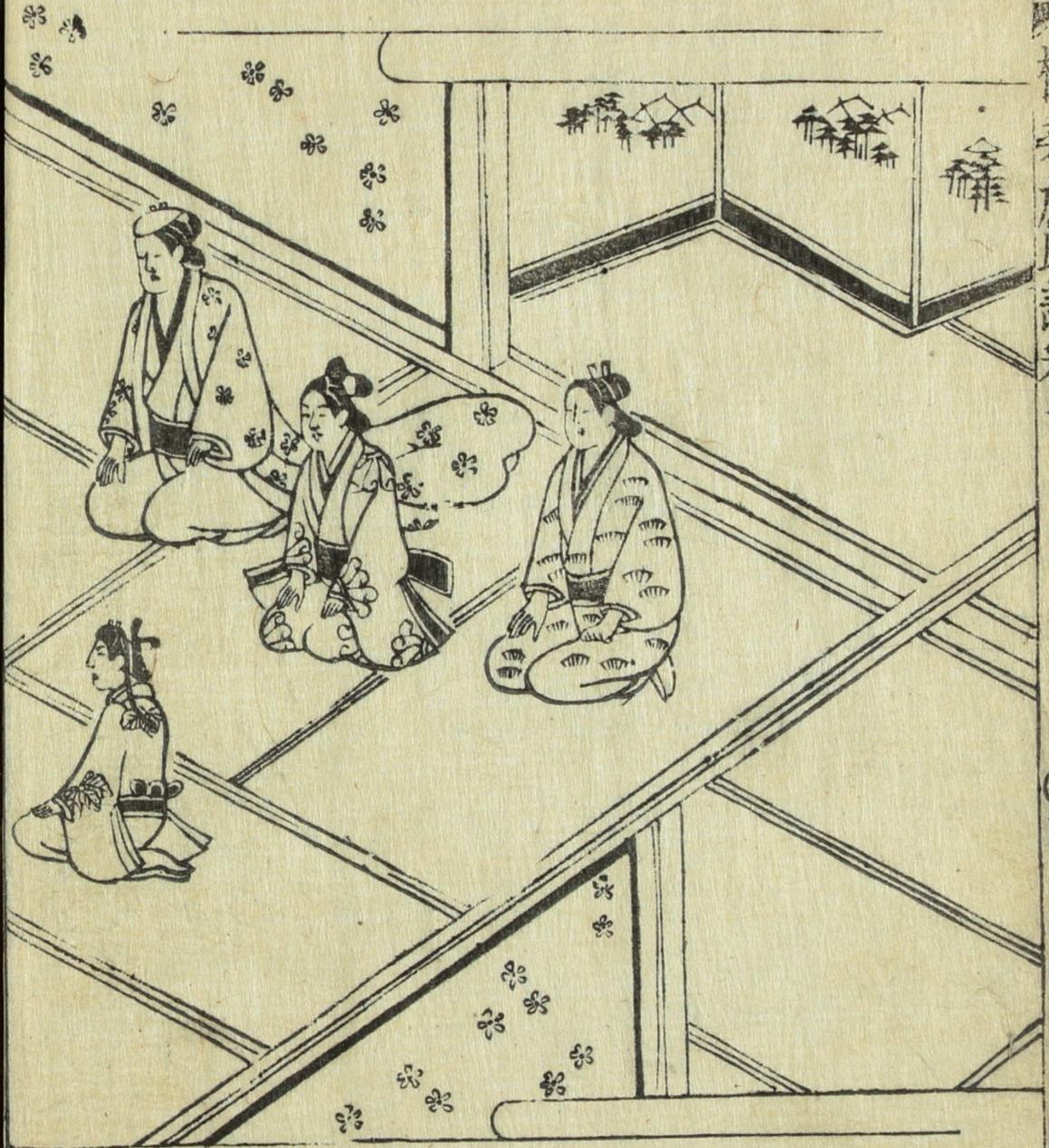
一。日。敦。慰。此。存。年。悲。勿。嗟。甚。案。別。行。与。新。業。辭。公

古。勿。回。外。還。无。老。与。衰。其。意。乃。は。は。は。め。亦。又。罰。俸。報。歟。は

又。抑。那。代。辭。論。又。と。く。誰。人。案。書。古。人。宴。集

曰。後。都。山。等。代。後。と。考。忍。れ。ハ。ま。ら。く。一。と。果。忘

一。と。一。と。さ。り。乃。ゆ。り。あり



○は月下の午乃日ぬく〜と〜と臍をぬけよ
鬚と一毛をち〜きは一年乃百餘よは門を至て洗
髪に和〜と焼その灰と蒸よ今〜よは地よ也〜

二十六七日は比鱈と製す〜一日より鮮よちまを
よつたを乃昂の肉よ別に鱈を他り今日午此
は用りものと製す〜一脱水〜と鱈と製すは味
美にして久〜堪〜此性冷なりあるは初よ
用りハ日殺多く歴〜らま堅破ちなりあるは製す
次但大寒肉よ製〜して毛その製りより水清
ハ毒にやり〜あり元鱈と製す〜よあ〜と酒氣

わら蒸よ米と〜又ハカ米とあ〜ら〜酒氣
阿波ハ心〜た〜初〜酒よこれ後ハ
解れり用ひ〜〜ありて酒氣を〜と
〜と用れハ酒ゆ〜と〜蒸れハ〜用
にたす必〜〜酒よこれ〜用
鱈酒の〜と製と〜中製書ハ〜
〜と〜と〜酒ハ〜ハ〜
い〜と〜と〜

二十日 屠種と合ひ〜

- 醫林集要屠種方 大黃 山椒 桔梗 肉桂 防風

各五各 川烏頭 白朮 菝葜 各二各 右八味對之 絳囊以

之入 陰白に井中ニ掛座に沈め元旦より布一

囊方より湯又浸しぬ乾しぬと向くこれと飲後

に囊方井中より湯と服す其の尚年瘰癧と

石疔 菝葜を少夜末の事あり日卒まであれ 赤朮 桂心 各七各

○又方 本草綱目よりく陳延之の赤朮方云 菝葜方也 赤朮 桂心 各七各

防風 一兩 菝葜 五各 蜀椒 桔梗 各五各 烏頭 二各五分

赤小豆 十四枚 三角乃絳囊よこれと乃そか右り

抄所 赤朮ハ菝葜木より根とハ肉桂の皮ゆつく 大黃 二各五分 桔梗 去蘆 川椒 去皮各 白朮

○又方 出千月 全度義 大黃 二各五分 桔梗 去蘆 川椒 去皮各 白朮

○本朝屠癧方 白朮 桔梗 山椒 防風 各一兩 肉桂 五各

大黃 二各五分

○白散方 白朮 桔梗 細辛 各一各

○渡嶂散方 麻黃 一各 山椒 細辛 防風 桔梗 乾薑

白朮 肉桂 各五分 已上三方典藥頭魚安信濃方也

○日月志方 繩と作り 湯日代用之 表法之具 條下ニ詳あり

晦日 又陰日 沐浴 晚食倍多より 懸懸と用之 一各

晚食此後 土より天よりよく 兼善と繋一 國老方

長親戚乃 家より儲く 皆此 庶人ハ不可 親戚の家

元徳一、二、三、四月令度義の久しきなり

○今年中一歳は用何事と西代業と今夕中夜は
焚ハ疫氣と毎と四時暴風は入るなり又今夕茶
本と多く焚ハ疫氣と毎と直生種よとえぬり

○保又治ま今宵繼豆とうらつて繼豆とらつての意
乃其のく人信ま

雙中乃區御色十月晦日の一もまに忍え侍り又あつて
金吾深御進傳所と何まに今宵まれ事とたじ

と物豆とらつて西鬼とあせざるや其後同答り
あつて西鬼乃相約するなり焚中あせむりハ
陰陽寮さいもんとして上り下り事とせしめ
あつて物豆とらつて西鬼とあせざるや其後同答り

かことゆつて内素井はつとまもんあり又殿

上人を御殿のうまきと柵乃弓葦乃矢あ

いゝまきとらつて鬼とた

らあつていゝまきとらつて

外代系御事三平天下法因疫疾而絶死
始修事大備すくゆりこれそのくもる又續るの

奥侍の香御事其後池の多又方丈れ之なり

堂深あまま二匹乃鬼おと都よつて

海乃のはまきとらつて

帝に奏しこれにはあまはまきとらつて

乃物とらつて帝より穴と封し二名三斗れま

鬼乃人とくらんととほとあせく糺をくろく一換
囊抄に足えゆれとこれ又委從乃祝る是ハ作風
とらに下すすこいまは日記よあすし乃かいら
ゆれハ上之の法をいふ一ハあはれかきしハ後
くハの書ハ拙翁畫稿畫社帳戸をくゆりこれ
の鬼とあせくきまのゆりまゆれハその勢より
○屠種と今日より井の中に浮くま一毒のあはれ
海芳齋の澤田乃ゆよ

一杯案酒き留跡。坐看新年上。梨葉霜。只恐梅花
明日老。秋餅お餅不。知。宅。

又冬過くゆふ

旅飯を飛鶴ふ眠。空ん何事持。凍死。右。郷。今。春
思千里。秋。梨。明。報。又。一。年

又方秋雁り

又与梅。花。把。一。杯。醉。飽。帳。字。等。春。来。須。更。使。是
の。年。事。留。の。を。各。一。併。園

又王裡り

今。案。と。智。史。明。年。の。日。供。を。送。一。杯。去。春。五
又。亦。氣。色。穴。中。の。客。執。帳。忘。借。風。光。人。不。定。已
善。後。園。梅

古今集の喜返羽櫛

これぞいふこととて昔一に物は海をへるも月をへり
後指をまふもあまをま後

とてまをれはありあへりといふもその年とてあへり
玉をまをりてあまをま國のあへり後

色あまのあまをり老したる物はあへりあへり後と後と
垣川百とて一四化

何事と後とをへり一四化とて一もふもふとてあへり
又那事

つねとていふこととてあへりあへりあへりあへり

○は萩獺乃形と圖とて枕とてあへりあへりあへり
て今の世傳よとてあへりあへりあへりあへりあへり

梅とてあへりあへりあへりあへりあへりあへり
唐代のあへりあへりあへりあへりあへりあへり
犀目半尾虎足宿其皮とてあへりあへりあへりあへり
後指之也澤又陸佃のいふとてあへりあへりあへりあへり
腫外之氣これ乃後とてあへりあへりあへりあへり
あへりあへりあへりあへりあへりあへりあへりあへり
食とていふこととてあへりあへりあへりあへりあへり

此際少婦多一鄙みをこころ多し

これいふ婦人女子のたつてきつてて夫のす
一三事々を所くと凡世修も危き男女とあく年
數よりく凶災ありしにきつてきつて一む
年ありげ年あり方人ありはれよめりは
ちててこれ災とまぬき人事とむ俗巫乃
ともぐとれと幸とて民乃誠をつつむるを
事と一ゆりされといふ事一中事乃書りて凡
日幸の四紀もをちつてむいむりてこれ海法か
ア一とや但内終よ大忌れ年安らる事と一と

大忌れ年と七忌れより九歳と加えち十一歳より
まくとより七歳十歳と十一歳二十歳と
三歳と十一歳と十一歳と十一歳と加えち九
を湯代敷たり湯桶れいありはれとこれあり
治よりんえよりちこれと一十年事とあるは
まといふ年の年を事とせよとあるは
教ととせよと一凡危年の事と一あるは
ゆつは使を西釋よりんといふ男の約とけし
善とち一悪とせよけいおのつりてこれ災とまぬ
一とめり約といひてまぬてたよ非佛の

或製人ひじりに物ゆをせると一たりと云ふ人
 乃其山物種を之れ天命を造り何れその是に
 とまぬり事ありやとの危年と云ふ事程を説き
 たりし作すべしは所んくそよく事いふこと
 たりしつゝ冬を乃後才三の成代日と臘日と号し
 け日非とすつゝ又古に聖賢民を功あり人とすつれ
 よし一漢書に漢よりえたり又玉船を興と臘は先
 祖とすつゝ略々百非と云ふ同のけして其意とあり
 小室大室二中日の百今世信よ室の中と稱すは
 乃よ食物其物をも製すといふは性よと云ふ久し
 たりて扱せの此時物守り物り又記す

○乾薑と製する法 母薑と室代中のあひ一七日
 赤白又日浸し取あげ皮と去り干貯し
 ○山菜とくらし貯べしを法 此山菜くかりたり
 年久しそ薯蕷と云ふい細刀して皮と去切らば
 て米粉とありひしけ多まつぬら陰乾す鉄と云
 ○糯米と穀米と海米まらる法 一日あ又漬し
 一日の乾すぬひまらる七次研久しく浸せり米氣
 ぬきくあり 糯米の米して陰干し穀米の飯
 ぐ粥として病人よ用れハ泄痢と云ふ腸胃之病

てん脈よりつまは

○救米と乾飯より作る法 救米と多く脈水より毎日
 後一蒸籠に置く一曝乾志と瓶に入貯置一用
 する時熱湯に浸せし速く飲む方粘る中一と胸脈に
 不塞苦あり難行乃時布に包てこれと沸湯に
 投す之ハ勿く飯と作り氣脈用送布一法中不可飲進之
 ○糯米代粉と多飛より作る法 上白代糯米と煮る
 一と臘月の水に浸し毎日あると少一二三日色を石
 臼とよく洗いて右れ米と磨しあるとよく入てまひ
 いとよく一滓と二再い石臼あくと磨して又よく

あると捕入あくと加之二粒並く法あると去りかく
 毎日水と換く水花より作り三日らるる後棉布
 の紗袋より右代粉と入してあくと去極よたるとよく
 水とよく煮し出つ後よ多く袋小入へりよく多れり
 多去ると又袋よりあくとよく入て目よりあくと
 去ると袋よりあくとよく入て目よりあくと
 付又よく入りて陰平よとらるりよく乾くと壺
 に入るとよく入て氣の洩るるはよく一用乃時ゆり
 くとよく解く一熱湯に投して後水に浸して
 食しあると汁によく再煮て食し又赤豆の煮て

くはたつるとうけく食の甚美あり性熱泄痢を
この脾胃と猶ふ事留けしと再煮て用へし世宿
食氣滞ありふも用へし

○赤小豆と白朮とを煮よるは赤小豆と安ん中を煮く
とくくはたつる入くして煮るの法子に收まへ
年と経久して用ては換せし異月一應解の
包よ用てもと煮くは即時よ用やすれと尊とす
○麻油と糖と糞大も切て二三日知くして後水
よつれ又二三日あつて二五割よよ付る米粉と削
きく又臘ありん八五一煮くは酒をわかし熱湯よ入

糞を此肉やうく二箇りか湯の中に煮く五割一籠
煮と次或久く煮て煎出し熱湯に換へて米
豆粉と煮く一用の粉をうけく煮く性熱と氣
と不塞恙久く煮くは四月中一八三百日一度水
を換へし二月より毎日煮くは四月一よよつる方
米粉と煮きれの候換へし奥あり

○臘ありし事留と製する久くして換せし凡
事留大豆と煮くは大豆を煮よ水志石粉斗入
物食の前後より用ありするは煮くは後八分
りてえ次煮よたを煮て聖れをて能志あり氣

乃淺きもの中にとおひ夕合をまてとけの
 能は急熱してありそ何又ゆ火とたきあてめて
 ぬかー白みくよくけくたれはあくと飲より明朝
 まてはてを同ー菊のみのころろをまてはえは
 如血とれい菊と功とと多く不費して能熱し
 豆汁不濃して性余く味美ありそ火と冬
 とたさるく變せしめんととれい大豆汁ぬか
 てりよになる有末粉の味前
 二三平粒分、
 考れい味糖也

○白米粉乃製法 大豆を石皮と去水後

蒸し熱して上白乃米麴を石五斗或石八斗三斗
 合くよくくうとつふ桶よはゆを二斗日とて
 用の味極く甘く色白

○五斗末粉と製する法 大豆一斗麴一斗酒糟一斗
 米糠一斗塩一斗右一のよつを合するなりぬりのりて
 よりい末粉性極く脆中につるを次病人は用て
 魚肉をくし考るる難し

○ぬかえと製する法 米のぬかとあてぬかえ
 瓶みて能ひして熱したる何火とたきまてそ
 豆粉白多しそり何粉かぬか一石よ塩一斗末

并香油のりごと入白く結つてまじせぬ上げ温氣
乃強りたるごとくも瓶とて毛髪をよむと
よく至来年正月より新し又白く入つては
髪よ入垂し

〇又法ぬくと多にかくこ〇大さあ丸帯の用
に海方や丸しとあ柄とて毛瓶にぬり入至十
又日行としてかくしあけ日より白く入
とままと塩とて白くはる合せは何れも柄よ
て毛瓶にぬり入しと髪垂り塩にぬりて
よく入しと丸に法を久しとて髪垂せぬ
臭かひ良法あり腹中に氣滞りて食滯しと
病人に用し

〇厚皂と塩淹する法 厚皂を丸毛とぬりて
脇と去洗りし毛髪をぬりて腹に塩と入
又厚入り毛髪所より塩と多く入又外より塩と
よく付足しつとまじせると合せさうまじはつて
一枚とけの塩ゆきとあるを厚紙よつてまじせ
苞よつてまじせりさけまじし法を丸に塩淹れぬ
〇塩淹れぬ法 海綿と紙比より塩と多くはき
柄よ入しと丸のちりぬりしとまじせぬ

博桑成集訓卷七

〇其

合せ一俵くまひりくして終やうとくまを
又鷹こもの包こもて煮くろまうけけはたをたれくんで
こまの包こも縄こもをくろく煮つろくかけて一日もま
とろよおひして塩だ結約する時つろくけ至
一丁を赤土の塩こもてこまうけ

○魚を糖漬なま乃法 魚を二塩と付く申日の上

一日一夜至 糖は漬ろくま三枚を塩の塩至 一丁はくろまの塩一丁 その後取出一

あはく塩と法去紙とくろくあ氣とぬく糖二塩
か入すれくひまんに塩と用ゆ魚を乃塩かぬれ
ぬれ後して塩と煮くろま魚と糖に漬くものち

とろくまを煮く一抄のこまのぬれぬれ
乃あはく糖を煮くろまあはくまうてすくろま
魚を風引くろく塩の糖をせされぬ魚を塩せす
を物と二糖用てまうてを耐く糖くろま酒を
塩をを加へやうけくろま

○糖餅なま乃法 塩とくろまはたろ切ろ骨と去酒よ
浸さぬまをくろくろかなんぬま平なまくろま
かじぬれ屋下まうてくろまを煮くろま
よとくろまの糖をくろまはたろぬれぬれぬれ
○焼大根なま乃法 中を初日蘿蔔の皮と削なまり

根の毒を去る小繩の毒を去るにわけ小繩は毒を去る
風を去る毒を去るにわけ日乾の毒を去るにわけ毒を去るにわけ
根の毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ

○胡蘿蔔のつけ物と毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ

人の生薬より葉中の毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ
毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ毒を去るにわけ

たり衣とさしくこれとつとあてり米と飯糰して袋
 に入んとし鬻す一米ひゆまハ又他の袋に飯糰
 たり米と今鬻す一或火とたまる竈の下に飯糰
 と用りも一やうにして火にあり目用氣同く
 後或薑湯温酒粥をこてあてて保赤す一先をこ
 と温すして火とあてわづら冷動と火氣と争く
 必要す又雄黄煇硝等分と用て末じ其眼角に點じ
 煇硝は十一月甲子の日と食りこの日あつたの
 類あり月令度義はよく猪肉猪肚生椒と食り
 忌む物と燐の果菜と食るべかられ此と多食ふは元

物此筋骨と食事かかれま書に書によく燻と食
 まりからまると害す牛肉と食りなるれ神と
 する蛇と食りなるれ神氣と持す蚌蝦乃類と食
 事もこれまに辰よといふは月のま草改と食へ
 一他月これと食へ病とあす

損軒乃後と雜書の中はく正月の食物禁忌を説
 きの多し毎ふ某月某物と食へ某病とまひ
 する法為家の物と夜とく一保よを病と
 記す此をふ気とくふ古れ方書にまひ言
 たり亦他家本草にまひ載り病のまひ多し

修すべし決しりるれども今以書より雜書此致
たそそ中より載て人の披閱に便せり此可也ハ
乃ん人此擇くこれと為程するより左のこ

十二月乃古候牙一馬小郷牙二鶴如集牙三雅如維六
少多凡三候あり牙四雜如乳牙五征多屬疾牙六
氷澤腹堅方大多凡三候あり
右一年十二月よりして
七年六候あり七年二候の
幸八月令及臣氏書候
混有文字多し事あり

十二月屋敷の刻數少多六与少多及辨大多六与大
異反辨之 月令度候

日本書紀卷之七尾

附 都鄙祭事記

正月

元日 禁中御節會 ○二日 車馬本形吉松唯子 ○四日
鹿多井殿池鞠振 ○七日 禁中御節會 菅面山系
才天系 菜橋川祓子 ○八月 十文字と後七日御節法
○十日 西之夷系 ○十三日 南都心經會 ○十四日 七
日と伊勢山回師子祓子 ○十五日 雲後爆竹 淡路秋
如子能 河内國平急所粥 後本國地及松唯子 ○十六日
林之河之良會 瑞壽 瑞林寺大放若 淡路岡魔堂念仏
○十七日 伊人系并龜危丁 ○十八日 禁中爆竹 ○十九日

八懐疫神系 廿五日と法地系○廿三日車山系山寺
初也系能○初宣 鞠系系

二月

朔日 七日と南教西多也同中宮と二月堂初○四日
初年系○七日 古宮と南教新の能○九日十の
少神初也達き系後後○十日 少山麻花寺系○十一日
匠繫會 暖減大徳松 在系圃系系○十六日 後後
○廿日 淡月系○廿一日 天全寺 伶人系○廿五日 送而
寺系 少神天系河系日 吉祥院中く 八徳あり 籠前宰府天系系○
初卯 大系聖系○初午 水系 生女堂 在系系
法系 系系圃水月与初午系○上申 春日系○彼系

三月

三日 替年 關籠 關籠 恒春初午 石山系 系津系 土伏
初午 初午 ○又日 一系寺系 竹系寺系○六日 一系寺
能系 今日より十日と暖減大系佛○八日 泉涌寺系
系○九日 水尾系 泉涌寺系山系神の初○十日 今系
安樂系○十一日 吉神會系花見○十二日 今より
日と天系経系津 日在八五の 初敷之初 今日より十日と系寺系大師
系 系山系系 ○十四日 系系佛 系系○十五日 良系
武別角田川大系佛 山系火の初○十八日 系系系

○十九日 塔婆新起身杖 ○廿日 東寺仁心弘法院位
之継女坊 ○中の午 午の日に云ふ時、初の午を云ふ 掃部江團出 中
玄佛 宗用 之流柔摘 石清水佛所

四月

朔日 比列院麻衣 ○二日 三日 南都多香の祭 ○三日
廣澤寺 純田寺 ○八日 灌佛 二門戒壇堂之修 ○
九日 法多地之衣 ○十日 南都の法事 ○十六日 二
井寺子園之衣 ○十七日 比列和号之衣 雜寶踊
日之山系照之衣 尾別之古系桂現之衣 ○廿日 勢
田屋見 ○廿一日 多志地休 ○上卯 掃部寺 之修

○上辰 八幡寺 ○上巳 山科寺 比列多衣 同堅田寺
○初申 大系寺 平野寺 ○初酉 松尾寺 ○初亥 大系寺
○中子 吉田寺 ○中卯 比列八幡寺 ○中辰 向日院寺
○中巳 久世寺 ○中午 賀茂寺 比列若の衣 ○中
申 賀茂寺 山王日吉寺 岩上寺 ○中酉 賀茂
賀茂寺 松尾寺 梅之寺 園白殿聖多之御衣坊 ○中
亥 湯島寺

五月

朔日 賀茂院之掃部江團出 ○二日 賀茂院之
賀茂院之掃部 園の御衣 ○七日 今文邪輿出 ○八日

○十三日 懷州宮國祓祭 ○十五日 今更祭 ○廿日
宮内省見 ○廿三日 坂本神社祭 ○廿八日 佐野河内
○晦日 祇薙御輿渡

七月

朔日 廿一と富土坊 ○二日 高麗の虫拂 廿八日 ○五日
祇園會渡り初 ○七日 祇園會 今日より十四日と祇薙
御輿会 ○十四日 祇薙會 尾別津御祭 竹生御祭
御後朝天子祭 ○十五日 尾別津御祭 江戶山宮祭
菟糸坊西祇薙會 他山宮 寺系小倉祇薙會 ○十六日
今日より明日と伊勢宮祭 ○十七日 相國寺懺法 志保寺
空 廣島祭 ○十八日 祇薙御輿入 ○十九日 四重河原
納原 七月廿一日 ○廿日 納言作切 ○廿一日 納言と乳の納原
○廿二日 古坂尾御祭 ○廿三日 松尾御祭 赤子能三友
明日又更 ○廿四日 是定十日坊 ○廿五日 法寺の虫干
王舌虫拂 古坂尾御祭 楊屋祭 ○晦日 賀茂祭 五月
社 佐野河内 江戶河原祭 日祭 ○六月 中 安藝之御市 祭

七月

朔日 賀茂後日社 ○六日 少野河内社 ○七日 少野社
壇煤拂 車馬虫拂 并池坊三友 苑多并夜翻 虫伏
参入 ○八日 又珠會 ○九日 古坂坊 ○十日 法水子日坊

○十二日十五日と五日に於ける焼籠 ○十四日禁印焼籠 ○十
五日ハ飯安岳の臥三升と云々 甚樂施修鬼 今月
より明日と云々 石動子日事 十七日と云々 浦吉河内一花
帳 ○十六日より火事山火の字 松崎崎崎法の子 和知を成約
永の火 松崎崎崎自塔より 和の意はせり
勢別 尚多夫津と入 ○十七日 素多の喜日事 ○十八日 所
之 津出 ○廿日 地飛事 ○廿日 権別 滋文 踊

八月

朔日 禁印一 甚多より 所吉を止 松尾お様 和泉國
村事 明り ○二日 堺天邪事 ○三日 少所天邪事 越前

敷雲氣比文事 ○八日 江別白飯一戸

山内より下山 きて一戸く ○十五日

伊和ハ飯事 甚多ハ飯事 甚多 畑枝事 ハ飯放事 甚多
之 外之事 七坂江川より 花火 度伏月見 比天深川ハ飯
事 屯門老海事 後前若崎事 ○十八日 津石並事 甚多
事 ○廿二日 度津吉太子信 ○廿三日 サめりこと 後前太宰
府 天邪事 ○廿四日 吉田事 ○彼岸會

九月

一日 山事 本懐事 ○八日 泉海寺 金刺會 ○九日 編事
甚多 磯事 磯磯事 伏見津事 甚多 七坂生事 甚多 磯後
吉良大明事 肥前長崎 延訪四事 ○十日 下野事

大津宮後之祭 五條天神祭 山科口の文祭 伏見の香祭
 ○十一日 伊勢の幣 出陣 吉高の伊勢御被會 ○十二日
 左秦祭 ○十三日 白川祭 ○十五日 完全祭 栗田口祭 江津御所
 御之三年上之度能馬 河内三祭 志保小倉祭 ○十六日 東
 山寺祭 王宮祭 ○十七日 栲別池田皇服漢御祭 ○廿日 下祭
 中女祭 多賀祭 竹田祭 建仁寺門外東祭 整富文祭 後世
 の民 ○廿二日 大坂府慶祭 沓祭 ○廿三日 大奉祭 ○廿四日 園の祭
 本福祭 淨寺祭 麻呂祭 別運慶祭 ○廿五日 天保流満祭
 田五祭 ○廿六日 山祭 ○廿七日 栲別池田祭 ○廿八日 鴨池祭 大坂
 五節祭 ○廿九日 月防祭 ○三月 丹波祭 丹波前祭

十月

又日 奴等遊入忌 十五日 浄土宗法寺十夜 ○六日 南無彌
 寺法會 ○十日 修別金良祭 十一日 豊福寺七會 ○十
 二日 日蓮宗新法 ○十三日 淨蓮宗王院靈王祭 栲別全利
 拜能 ○十六日 本福寺拜能 ○十七日 肉付不御能 ○廿日 江
 戶能商人集會 四條寺町土佐寺の文藝文辨 ○廿五日 出陣大社御
 十一日

十一月

八日 小倉の祭 櫛形祭の事 ○十三日 舟也祭 ○廿二日 一向宗の山
 廿四日 五重寺の佛名 ○廿五日 大師儀 妙善大師 寺あり ○廿八日 三
 喜日御祭 ○廿九日 之祭 ○初申 大文禮現祭 ○廿日 結御祭

十二月

十五日ハ懷安居えんあん○廿二日大徳寺だいとくじ一死いつし○十九日廿五日
枯尾山佛名經○晦日 祇園寺ぎんえん多りけ 寺てらあり友とも和わ有あり
乃移のり○寺てら外ほか又また條じょう五ご非ひ系けい 吉きち田でん系けい

比ひ外ほか國くにのの大だい系けい土つち係けいととのの多た倍ばいへへななれれとと其その多たり
甚しん親しん唐たう流りう代だい智ち多たれれのの中ちゆう安あん倍ばいととのの多たり
阿あららののとと

和歌系事記終

皆貞享五年戊辰三月上澣維陽書肆日新堂壽梓

貝原先生編輯目錄

醉墨齋藏版

日本歲時記

日本釈名

續名數

日用良方

鄙事記

同後扁

初學知要

和爾雅

初學詩法

和字解

和漢事始

千字類合

大坂

村上清三郎

書林

京都

小川太左衛門

江戸賣所

同 彦九郎

